纏層

TENSO

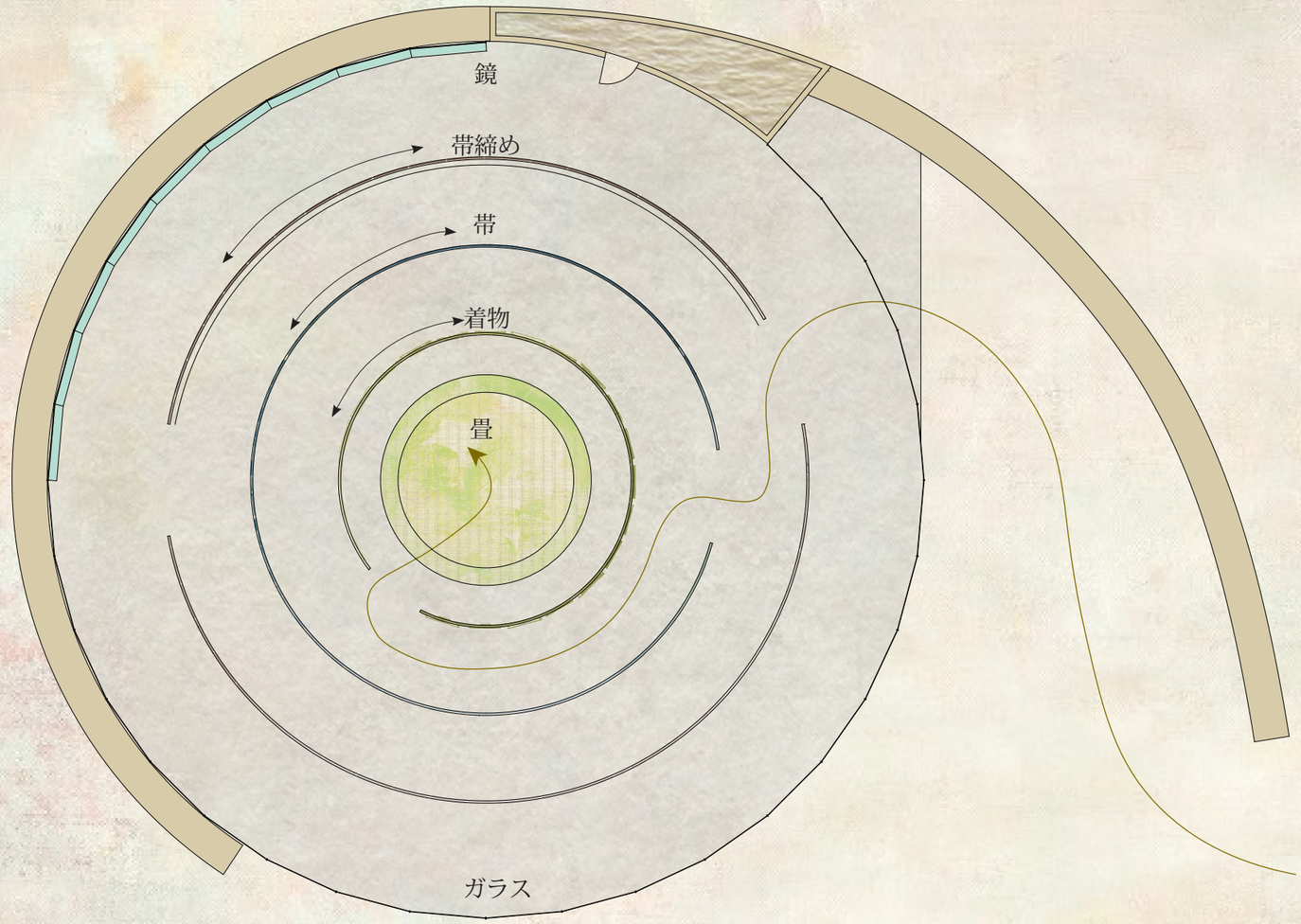
着物を装う行為は、布を身体に重ね、内から外へと存在がにじみ出ていく体験である。
本計画では、その「纏う」という所作を建築の生成原理と見立て、空間を構成した。
着物の特徴である面的な構成から、中心に立つ身体のまわりに、
着物・帯・帯締めのレイヤーが円環状に重なり、
それぞれを回転させることで装いを選ぶ行為そのものが空間体験となる。
層の重なりによって装いの主観と客観が交差する「纏層」は、
空間そのものが装いであり、建築が身体とともに重ねられる構成である。

着物の特徴から成る空間

着物は「面」でできている
— 立体を裁断せず、布を重ねて身体を包む。
空間もまた、面の重なりで構成される。

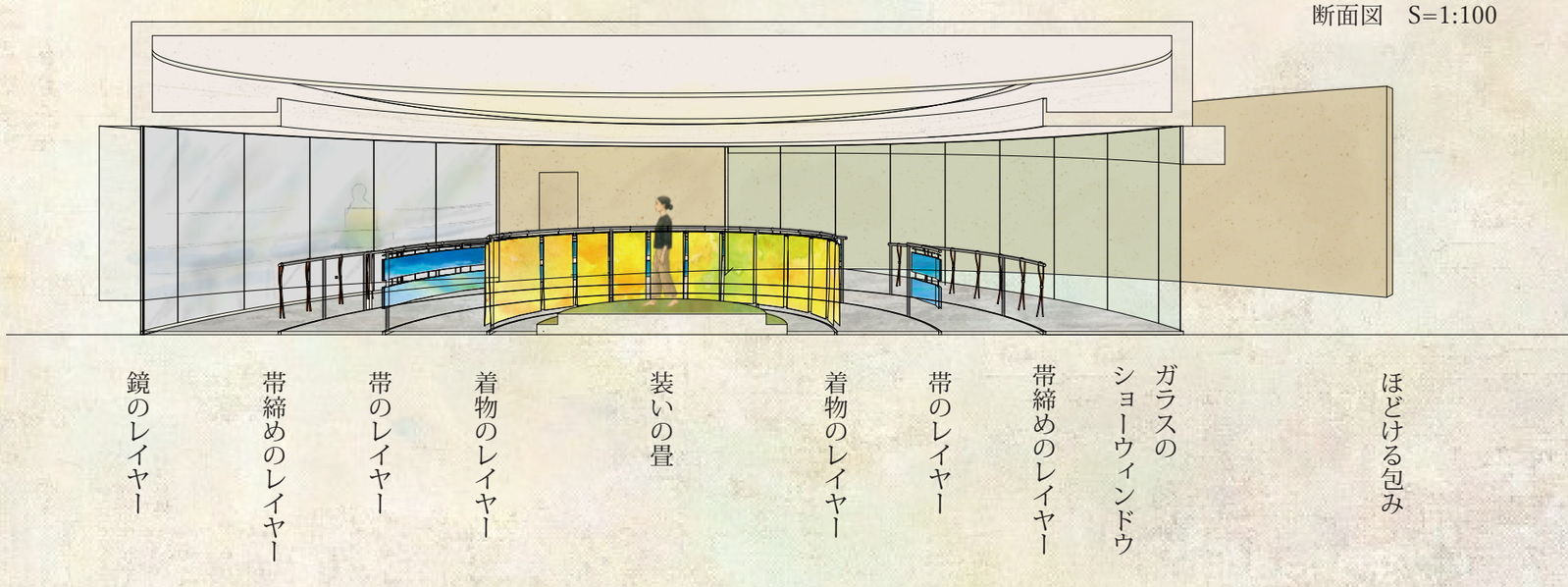
装いは「私」を中心に立ち上がる
— 洋服のように仕立てられるのではなく、
着物は着るたび「私」に合わせてかたちを変える。
この空間では、人が立つことで建築が装われる。

組み合わせに無限の余白がある
— 着物・帯・帯締め。その色・柄・結びにより、
一人ひとりの選びが空間に現れる。
空間の構成は、装いの行為そのものと連動する。



平面図　S=1:100

鏡は「私」を映し、
ショーウィンドウは「誰か」の視線を招く。

それらをやわらかく包みこみ、外殻はほどけ、
人を迎え入れるたもととなる。

断面図　S=1:100